

令和元年5月28日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02556

研究課題名（和文）アドルノとクラカウアーの初期思想における 時間と空間の相互陥入 モティーフの解析

研究課題名（英文）Analysis of the "spatio-temporal interaction" motif in Adorno and Krakauer's early thoughts

研究代表者

竹峰 義和（Takemine, Yoshikazu）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：20551609

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「時間の空間化」という概念を手がかりとして、1920年代から30年代にかけてのアドルノおよびクラカウアーの芸術批評に共通して見られる「空間と時間の相互陥入」というモチーフを検証するものである。とりわけ彼らのテキストを、寓意・トポロジー・身体的知覚という三つの観点から考察するとともに、W・ベンヤミンとの関係や、同時代の言説を哲学的・芸術批評的な視野に納めつつ、ヴァイマル時代の哲学的・芸術的な布置状況のなかに置き直す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究がフランクフルト学派の初期思想を検証するにあたって注目した「空間と時間の相互陥入」というモチーフは、20世紀以降の近代社会における急速なテクノロジー化の流れと深く関連しているが、その傾向は21世紀になってさらに加速化している。本研究から得られた理論的な観点は、メディア・テクノロジーと知覚の変容というアクチュアルな主題について考察するための新たな視座を開くものである。

研究成果の概要（英文）：Using the concept of "Spatialization of Time" as a cue, this study examines the motif of "space-time interpenetration" which was commonly seen in the art criticism by Adorno and Krakauer from the 1920s to the 30s. In particular, their texts are examined from the viewpoints of allegory, topology, and physical perception, while focusing on their relationship with W. Benjamin and the philosophical and artistic discourses during the Weimar era.

研究分野：ドイツ思想史

キーワード：アドルノ クラカウアー フランクフルト学派

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまでのフランクフルト学派研究では、ベンヤミンが初期アドルノに及ぼした思想的な影響については膨大な量の研究が捧げられてきた。だが、アドルノとクラカウアーの思想的な関係については、概説的な記述に終始しているものが大半であり、本格的な研究は国内外でほとんど存在していない。くわえて、ヴァイマル時代のドイツにおける〈空間と時間の相互陥入〉というモチーフを、哲学・芸術・メディアを横断するかたちで包括的に検証する作業についても、ドイツのモダニズムにおける「リズム」の問題を検証した Cowan, *Technology's Pulse*, 2011 など、特定の主題や人物に焦点を当てた幾つかの試みを別とすれば、未開拓のまま残されている。

2. 研究の目的

本研究は、アドルノの音楽哲学のなかの登場する「時間の空間化」という概念を手がかりとして、1920年代から30年代にかけてのアドルノおよびクラカウアーの芸術批評に共通して見られる〈空間と時間の相互陥入〉というモチーフを、同時代のドイツにおける哲学的言説／芸術実践／テクノロジー・メディアとの関連のなかで検証する。とりわけ、音楽、映画、都市などを論じた彼らのテキストを、寓意・トポロジー・身体的知覚という三つの観点から考察するとともに、W・ベンヤミンとの関係や、同時代の言説を哲学的・芸術批評的な視野に納めつつ、ヴァイマル時代の哲学的・芸術的な布置状況のなかに置き直すなかで、そこに産業的・都市的なモダニティや、映画や写真といった技術メディアとの関連性を析出することを試みる。

3. 研究の方法

(1) アドルノの「時間の空間化」概念の体系的考察 1920年代より音楽批評家としての活動を始めたアドルノは、十二音音楽等の新たな作曲技法の理論的分析をおこなう一方、技術による音楽の媒介という問題にも積極的に取り組んだ。そこで共通のトポスとして浮上するのが「時間の空間化」という概念である。それは、時間芸術としての音楽が、形式と素材の解離(シェーンベルク)や、テクノロジーによる物象化(レコード)によって空間化する事象のうちに、アドルノは異なる時間性の寓意的表現という新たな位相を読み取ろうと試みていた。本研究では、この〈時間と空間の相互陥入〉というモチーフについて、ベンヤミンの寓意論およびアドルノの中・後期思想などとの関連を踏まえながら、その理論的内実を解明する。

(2) クラカウアーの「表層」概念を構成する諸契機の解明 クラカウアーはその初期著作で、映画、写真、都市、大衆など、ヴァナキュラーな対象を頻繁に論じたが、それは「表層」への関心と概括できよう。ここでの「表層」は、歴史的凋落の寓意的表現という意味とともに、空間化された時間を新たに編成するトポロジー的な操作を可能にする平面と、日常生活のなかで覆い隠された諸事物の空間的・時間的な物質性を身体的に知覚させるインターフェースという二重の側面を備えている。本研究では、ヴァイマル期に執筆されたクラカウアーの映画批評におけるモニタージュの扱いに着目しつつ、アドルノおよびベンヤミンとの比較のなかで、クラカウアーにおける〈時間と空間の相互陥入〉というモチーフを思想的に輪郭づける。

(3) ヴァイマル時代の思想・芸術における〈時間と空間の相互陥入〉というトポスの包括的検証 空間と時間の融解というモチーフは、アドルノとクラカウアーの著作に限られるわけではなく、同時代の思想的言説や芸術実践を横断的に特徴づけるものであった。本研究では、ヴァイマル時代のドイツの哲学・写真・映画における「時間の空間化」の問題について総合的に検証したうえで、アドルノとクラカウアーのテキストをその文化史的な文脈のなかに位置づける。くわえて、〈時間と空間の相互陥入〉というトポスを、他のフランクフルト学派の思想家——とりわけベンヤミンとクルーゲ——のテキストとの関連のなかで再検証することで、思想史的な連続性のうちに置きなおす。

4. 研究成果

本研究の主な成果は、次の3点にまとめられる。

1) アドルノの思想における〈時間と空間の相互陥入〉のモチーフの理論的な発展過程の再構成

本研究はまず、アドルノの初期から中期にかけてのシェーンベルク解釈の比較・考察をつうじて、アドルノの十二音技法解釈における「時間の空間化」のモチーフが、1920年代から30年代初頭にかけての音楽批評においては「物象化」というモチーフと不可分であったのたいていして、40年代以降の音楽論になると、基本的な理論図式は維持されつつも、さらにそれが主体による自己展開の破綻という哲学的な主題と結びついているという点を明らかにした。さらに、アドルノの芸術論における「ミメシス」の問題を、主体性／客体性、時間性／空間性のアポリアという観点から、アドルノのヴァレリー論をもとに検証する作業も進めた。その主要な研究成果は、平成28年10月に上梓し、第8回表象文化論学会賞と第40回和辻哲郎文化賞を受賞した単著『〈救済〉のメーディウム——ベンヤミン、アドルノ、クルーゲ』(東京大学出版会)の第4章「芸術の認識機能」にまとめたほか、平成29年10月に開催された日仏コレク「芸術照応の魅惑 3 ヴァレリーにおける詩と芸術」で「絶対的なもののミメシス——ヴァ

レリーを読むアドルノ」というタイトルで口頭発表するとともに、同名の論考を三浦信孝／塚本昌則編『ヴァレリーにおける詩と芸術』（水声社、2018）に発表した。また、関連論考として、ストロープ＝ユイレの映画作品をアドルノ美学の観点から読み解いた論考「イメージから抵抗へ——アドルノ美学とストロープ＝ユイレ」、および亡命時代のアドルノの書簡をもとに「投壘通信」という形象について考察した「投壘通信の宛先——フランクフルト学派の思想家たちの亡命期の手紙」を執筆・発表した。

2) ヴァイマル時代のクラカウアーの「点状化」概念における空間性と時間性の解明
つづけて本研究は、『探偵小説の哲学』、「理念の担い手としての集団」、「待つ者」、「旅行とダンス」、「写真」などの初期クラカウアーのテキストを分析するなかで、有機的な紐帯を喪失し、バラバラに孤立した大衆——クラカウアーは「点状化」と呼ぶ——にたいして、そのような現状を批判ないしは悲嘆するという立場から、そこに新たな形態の公衆が組織される可能性を読み取るという立場へと徐々に変化していった軌跡をたどった。とりわけ、本研究から、「点状化」という概念をもとにクラカウアーが、幾何学的な「モザイク模様」を構成する「点」となった人々について論じるなかで、人間身体解体と表層化という「大衆装飾」の前提をなす契機を徹底化させることで、その桎梏を内在的に超克することを志向していたことが明らかとなった。その成果は、平成31年に刊行された共編著『イメージ学の現在』（東京大学出版会）に収録された「点になること——ヴァイマル時代のクラカウアーの身体表象」という論考にまとめた。

3) フランクフルト学派の思想的文脈のなかでの〈時間と空間の相互陥入〉の比較考察
さらに本研究は、ヴァルター・ベンヤミンとアレクサンダー・クルーゲを〈時間と空間の相互陥入〉という問題系との関連のなかで分析することで、フランクフルト学派の思想的文脈のなかでこのモチーフを位置づけなおす作業にも取り組んだ。具体的には、①ベンヤミンの叙事演劇論のうち、「身振り」や「中断」といった契機をつうじて主観的認識の枠組みからいったん離れ、おのれをメタ的な自己反省＝自己読解の対象にするという初期ロマン主義的な図式が一貫してその理論的基盤をなしているという事実を明らかにするとともに、時間と空間、主体と客体とが相互に陥入しあうことで新たな自己認識の地平が開示されるという認識において、ベンヤミンとクラカウアー、さらにはアドルノの思考に共通点があることを示した。また、②クルーゲの映像作家としての活動を検証するなかで、クルーゲにおけるモンタージュの手法が〈時間と空間の相互陥入〉を志向するものであること、そしてそれがとりわけベンヤミンの理論に立脚していることを明らかにした。①の成果は、平成30年に刊行された「サンチョ・パンサの歩き方——ベンヤミンの叙事演劇論における自己反省的モチーフ」（『思想』1131号）にまとめた。②の成果は、平成30年7月に開催された日本ドイツ学会で「対抗毒としてのイメージ——アレクサンダー・クルーゲのメディア実践をめぐって」というタイトルで口頭発表するとともに、翌年に同名の査読付き研究論文を『ドイツ研究』に発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

1. 竹峰義和「対抗毒としてのイメージ——アレクサンダー・クルーゲのメディア実践をめぐって」、『ドイツ研究』53号、査読あり、80-89頁、2019年
2. 竹峰義和「サンチョ・パンサの歩き方——ベンヤミンの叙事演劇論における自己反省的モチーフ」、『思想』1131号、査読なし、132-148頁、2018年
3. 竹峰義和「投壘通信の宛先——フランクフルト学派の思想家たちの亡命期の手紙」、『UP』532号、査読なし、1-6頁、2017年

〔学会発表〕（計2件）

1. 竹峰義和「対抗毒としてのイメージ——アレクサンダー・クルーゲのメディア実践をめぐって」、日本ドイツ学会大会、2018年
2. 竹峰義和「絶対的なものミメシス：ヴァレリーを読むアドルノ」、2017年度秋季日仏シンポジウム：芸術照応の魅惑3—ヴァレリーにおける詩と芸術、2017年

〔図書〕（計4件）

1. 竹峰義和「点になること——ヴァイマル時代のクラカウアーの身体表象」、坂本泰宏／田中純／竹峰義和編『イメージ学の現在——ヴァールブルクから神経系イメージ学へ』（東京大学出版会、2019年）、113-128頁
2. 竹峰義和「〈絶対的なもの〉のミメシス——ヴァレリーを読むアドルノ」、三浦信孝／塚

本昌則編『ヴァレリーにおける詩と芸術』（水声社 2018年）、289-302頁

3. 竹峰義和「イメージから抵抗へ——アドルノ美学とストロープ=ユイレ」、渋谷哲也編『ストロープ=ユイレ——シネマの絶対に向けて』（森話社 2018年）、219-238頁

4. 竹峰義和『〈救済〉のメディアウム——ベンヤミン、アドルノ、クルーグ』東京大学出版会、2016年、全454頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。